

図書紹介

一ノ瀬正樹『原因と結果の迷宮』勁草書房、二〇〇一年を読む

奥村 勝良

これは、技術者をリタイアした者による紹介文であり、コメントである。

著者一ノ瀬氏は、人の心にかかわる原因と結果の関係を、現代物理学の基礎、量子力学における両者の関係と、類似するものと見ている。

著者の一ノ瀬氏は一九五七年生まれ、東京大学哲学科の助教授である。ヒューム因果論の残響をハルモニア、メロディ、リズムという音楽概念にたとえて分析している。その音楽としては、クラシックやオーソドックスなジャズでな

く、現代音楽やフリージャズを念頭においておられるようである。評者は哲学界の人脈を知っているわけではないが、著者一ノ瀬氏は、おそらく新進気鋭の哲学者であろう。

それでは、著者の目次にしたがって『原因と結果の迷宮』に入って行こう。

序章 因果的超越の果てしなき後退

最初に「因果的超越」という概念が提示されている。これは、ブレンターノの提示した「志

向的内在」の反対概念として、著者が考案したものである。評者が、両者の定義を対比してまとめると、次のようになる。

「あるものを把握するとき、そのあるものが『向かう先』に言及して理解しようとするのが『志向性の文法』であり、そのあるものが『出てきた源』を引き合いにして捉えようとするのが『因果性の原理』である⁽¹⁾」

次に内在と超越とが対比される。「内在」とは、人の意識のなかに何かが実在する、あるいは、存在するという心的現象であり、「超越」とは、意識から独立した存在、すなわち、たとえば、現存する自己を未来に向かつて超えることである。

著者は、「因果的超越」という概念を果てしなく後退する暗黒のことだとしている。「ここには、原因』ではない』という否定によつてし

すぎない」と言い、他方「『責任』とは、当の主体が意識内部で確認することによつて生じたり生じなかつたりするものでなく、当の主体を越えた対他的文脈においてのみ生成しうる事象である」と言う。先に述べた「『志向的内在』があくまでも意識に閉じこもる文法である限り、それは『責任』の語りを説明するには明かに役不足であるとするべきであろう」と言う。無意識に事故を起こした運転者が責任を問われることから明らかのように、「志向性と『責任』は相性がわるい。ならば、『責任』概念をめぐって浮上した『自律』は『志向的内在』と無縁であるといわねばならない」としている⁽²⁾。

著者は、ある環境の中にいる誰かが瞬間的に応答する知識を「人格知識」と呼ぶ。これは、知識の内容よりも主体のおかれた環境や主体自身⁽³⁾のあり方に着目するものである。この知識は、

か表現できない世界の不安定なありよう、いわば世界の奥底に潜む暗黒性、が立ち現れている。」「世界は徹頭徹尾『他律』に晒されている」と言う⁽⁴⁾。

一旦このように述べた後、「『因果的超越』という『他律』が因果に関する最も根元的な事態として立ち現れてきたその瞬間に、……『他律』的に決定されてしまっている『結果』としての『自分』がかえって『自律』的な『原因』として屹立していることが見届けられねばならない」として次に入つて行く⁽⁵⁾。

では「自律」とは何か。それを考察するとき、著者は、「『自律』が、全き意味での行為、認識の発端なのではなくて、『決定されてしまっている自分』という言い方が示すように、『因果的超越』という『他律』の作用をすでに被っているということを抱懐する限りでの『自分』に

主体のあり方やその環境に着目せず、持続的に応答する普遍的なものに影響されるとき「没人格知識」となる。このように「『自律』的な『人格』が持続的な実在と見なされるべきものは、制度からの要請であるから、著者は『自律』をもった人格というものを『制度的実在』と呼ぶ⁽⁶⁾。

「哲学の語りは、いわば本能的に、自明な事実⁽⁷⁾に目をつむる。こうした本能は、確かにもつともな理由に裏づけられているし、結局はそれに従わざるをえないとしても、自己言及的事態という自明な事実を踏まえた上でそうした本能に従うことの意味を問いつながら進むべきなのであつて、自己言及的事態にそもそも気づかない、あるいは気づいても無視する、という考察態度は誠実であるとはいえないと私は思うのである⁽⁸⁾。」

「私がここで意味しているのは、『因果的超越』という事態の発端となる『自分』は、時間的な現象系列として行為や認識を捉えたとき、そうした行為や認識が出現した瞬間においては、『自律』的な原因として現れるが、それが『決定されてしまっている自分』である限り、現れた『自律』は直ちに破棄され、ただ『因果的超越』という『他律』が再び全体に瀰漫していくだけであるという、このことである。」

「確かに、ここでの『自律』は瞬間的には文字通り実在するといえるだろう。しかし、私たちは、この『自律』をもっと持続的な実在へと拡張しつつ理解している。そうでなければ、——この世界での私たちの生それ自体が立ち行かなくなるであろう。よって、ここに、単なる瞬間的なものを持続的なものもあると見なす構えが現れるのである。」

か。……すなわち、言い換えれば、たとえ瞬間的にせよ、『決定されてしまっている自分』と表現される因果関係のリアリティを受け入れるところから『制度的実在』は生い立ってきたのである¹⁰⁾として、この序章を終えている。

続いて著者は、「因果的超越」と「制度的実在」、あるいは「他律」と「自律」について、さらに詳しく説明すると同時に、因果概念をめぐる、これら二つの位相の間に見られる一種の亀裂について、以下のとおり推論を進めてゆく。

第一章 ヒュームの残響

著者はヒュームの因果論をひとまず謎としている。「ヒュームは、『接近』『継起』『必然性』の三つを因果関係の特徴と捉え、」多くの出来事や事象を経験すると、それらを結びつける習慣が生まれる。ある事象が現れると、他の事象

こうした意味で捉え返される『自律』のあり方は、『制度的実在』と呼ぶことができるだろう。」と述べて、

「ならば『人格』の『制度的実在』こそが、私たちの実在理解そのものだといふべきではなからうか。いずれにせよ、『制度的実在』が多層的な意味づけをその都度担っていきながら世界理解へと与っていくことは、『人格知識』と『没人格知識』がつねに互いに反転していく」としている¹¹⁾。

著者は、「私には、『因果的超越』と『制度的実在』の両方の位相ともが、因果についての私たちの日常的語法に深く根差していると思われるのである。実際、『自分』は何かを支配されているという想いと、『自分』は何かを作ったり所有したりできるという想いと、ともに私たちの最も基本的な自己了解ではなからう

が未来に現れることを、信じるようになるという、¹²⁾「こうした『信念』に至る『心の決定』こそが因果的『必然性』の正体なのだ」と言う¹³⁾。

「ヒュームは人間の行為に関して自由と因果的必然性が両立する」ことを自覚した哲学者であり、「自由を『意思の決定に従って行為したりしなかったりする力』と規定する」としている¹⁴⁾。

人は、行動しようという信念を持っていても、状況を見て行動しないことがある。これはあることを決定する原因が「他者」に求められるという事態であり、「因果的超越」に相当すると評者は考えるが、著者は、「もともとヒュームは因果性の問題の核心を因果推論に求め、それを、感官や記憶に現前するものを『越えて』何らかの存在を確信させる働き、として規定していたのであり、そうした『現前するものを越えて』という規定にもすでにして『他者』の視点を呼

び込む素地が備わっていたと考えられる。……これこそ、『因果的超越』にほかならないのである」と述べ、ここで「他者」の概念を突き詰めていくと「神」の概念に至ると注記している。¹³⁾

自己のもつ認識は、「他者のなす因果性理解それ自体また、さらに別の『他者』によって決定づけられるから、……認識の主体である自分は絶え間なく消去されていく、」認識に関するこの現実を、著者は自己消去への暗転と呼ぶ。「ヒュームが見届けた世界とは、自分が因果関係を理解しているという事態そのものが、『他者』へと暗転し続け、因果関係のリアリティが消滅していくと同時に、そうした因果関係を理解している自分の実在性もまた自己消去されていくという、いや、というより、自分などともとなかったとして無化されていくという、そ

著者は、David Humeを「歴史的に見て、実質的にまさしくこうした因果関係のリアリティを根こそぎ剥奪してしまい、徹頭徹尾、『因果的超越』の位相からのみ『自分』そして世界の成り立ちを描き出そうとした哲学者、因果論において暴君として立ちはだかっているといつてよいほど強大で圧倒的な哲学者」として捉えている。¹⁴⁾

「『他者』への暗転という影は、奇蹟論によってさらに陰り返され、そうした闇としてヒューム哲学は残響しているのである」¹⁵⁾が、ヒュームの残響について考察した本章を、著者は次のようにまとめている。

「ヒューム因果論が描き上げた『因果的超越』の道筋は、『他者』によってすでに決定されてしまっている、という把握に導かれていたし、ヒューム奇蹟論がさらに掘り下げた『因果的超

うした真の闇なのである」と言う。¹⁶⁾

「ヒュームは、『奇蹟』を自然現象の侵犯である」としており、自然法則そのものの因果に一点の疑いも持っていない。奇蹟を伝える証言の真理と虚偽に関して、自然法則が成立するとき、奇蹟の確率はきわめて低く0に近い。逆に、奇蹟が成立して、自然法則が成立しないとき、奇蹟の確率は1となる。奇蹟の証言が、事実の結果である確率はきわめて低く、したがって、奇蹟はありえないというのが当時の論法であった。

確かに、原因の解明されていない自然現象は二一世紀の今日においても無数にある。自然法則と奇蹟の間は揺れ動き、その不確実と非決定が人の心を悩ませている。著者一ノ瀬氏は、この迷宮の様子をうかがい、そこに「こだま」するヒュームの残響の余韻を聞き届けようとしている。

「越」の様態もまた、すべてを偶然とする視点にせよ奇蹟は不可能とする視点にせよ、世界は決定されている、という見方を根底に宿している。……ヒューム因果論は、徹頭徹尾『決定論』の考え方で貫かれている。しかも、そうした決定論の見方は、例の『一般公理』の通底性から窺われるように、決定論という言い方に反するようであるが、確率という『不確実性』を表わす概念を本質的に伴っている。¹⁷⁾

「ヒュームの暗闇の残響から少しでも遠ざかる針路を見出すには、『未来』へと視線を転換してみるのが有効なのではなからうか。実際、未来が文字通り未来である限り、過去が決定されているという意味での決定論は未来に対してつねに意味をなさない。未来は、決定されておらず、よって確実でも不確実でもない。未来は、まさに非決定なのである。¹⁸⁾」

「ヒューム因果論は、決定されているけれどもよく分からない、という過去志向的な視線からする『不確実性』によって構築されていたのだが、それに対して、自律的な責任を担いうる人格を論じうる未来志向的な視線からする『非決定性』を対峙させてみたかどうか」と著者は、考えている。¹⁹⁾

この章の最後の註には、本書のコンセプトが表示されている。²⁰⁾ 下記のとおりである。

	(瞬間)	(持続)
(過去志向、他律)	人格知識	没人格的知識
(因果的超越)	他律性の瞬間	持続的他律
(未来志向、自律)	自律性の瞬間	持続的自律
(制度的実在)		

第二章 因果の知覚—残響のハルモニア考

著者は、ヒューム因果論の第一観念「接近」を、音楽のハーモニーにたとえており、これを

かく誘いは分かるような気がする。

このようにして原因を探求するためにデータを多数集め、確率統計によって何らかの整理を行う。著者はこれを「操作主義」という。さてこの整理の後、

「因果関係や世界は私たちがそれを理解しようとするその瞬間に、多様なものが束となって調和的に立ち現れ、作品となる。それは、その瞬間に完成しているハルモニアなのである。そしてそのように完成していると捉えられる限り、因果の知覚という事象はヒュームの残響を消音する道筋をおのずと指し示していると考えられるのではないだろうか。というのも、完成している作品は、完成しているというリアリティを定義的に受け持っており、少なくともその瞬間には、際限のない因果的超越を免れるからである。²¹⁾」……「このことは、因果や世界が作品で

「瞬間の位相」と呼ぶ。人は無数の出来事に遭遇して生活しているのであるが、結果を知ることとはできて原因を知るとは少ない。「接近」とは瞬間的に生成する知覚との「相聞」であり、これをひとときのハーモニーにたとえることは可能である。

ある出来事が起こったとき、それを観察し、その原因を探求するが、その姿勢は人によって異なり千差万別である。これを「理論負荷の違い」と名づける。

次に著者は、「アブダクション」というタイトルを用いている。「かつてパースが提示した推論過程の一つで、仮説提起の過程のことである。²²⁾」アブダクション (abduction) を辞書でみると誘拐とでていた。出来事の原因を探求することは、ひらめきによる示唆が妥当であるかどうかを洞察することであるから、誘拐はとも

あり、それが鑑賞や評価の概念に巻き込まれるのならば、「……」作品のリアリティは『作者』のリアリティという『制度的実在』の様態の原点へと収斂してゆくはずである、……ならば同時に、『制度的実在』の自律性という本性からして、因果性の問題は、『作者』が作品の原因となる、という場面へと昇華していかねばならない。ともあれ、こうして、因果の知覚というハルモニアはヒュームの残響から発しながら、少なくとも瞬間的に、その残響から出てゆく兆しを奏でる²³⁾と言おう。

第三章 逆向き因果—残響のメロディ分析

「次には、瞬間ではなく、過去から現在までの時間の連続のなかでそうした脱出が可能か、という考察、つまりは、残響の旋律にまつわる考察に」進んでいる。²⁴⁾

著者は、ヒューム因果論の第二概念「継起」を音楽のメロディにたとえており、これを「連続の位相」と呼ぶ。このような時間的な順序をどのように分析しているか。ヒュームのメロディに乗った著者の分析を見てみよう。

現代物理学によると光よりも速く進む粒子「タキオン」があり、時間を反転させて振舞う「反粒子」が存在するという。「こうした自然科学の現状が逆向き因果に関する検討を誘引した」ようであるが、著者は「論理的に矛盾するか」、「過去は操作できないか」などの考察を経て、「因果的探求は、最初に異常な出来事を結果として認識し、その後その原因を探る、という仕方で行われるのであり、その意味でまさしく逆向き因果が成立している」と言う。

しかしさらに考察をすすめた後、著者は、「その原因が未来にある」という意味での逆向きは、かえって他に律せられているという深層の事態を含意していたのである」と述べて、最後に、

「こうした『決定』は突き詰めるならば言語体系や理論に関する『決定』へと連なるものであった。ならば『決定』とは、根本的には他律的なものであるとしても、言語や理論という濃密に歴史的かつ制度的なコードに沿いながら、過去から現在への主体の連続性のなかで現出する事態であることになる。私は、おそらくここに『責任』概念のありかがあるのではないかと見る。少なくとも、責任概念が生い立つようなこの地こそ、むしろ『因果的超越』へと至る私たちの因果的理解の基盤であるといえるはずである。この点に至るなら、過去から現在というテンズに関して、『因果的超越』に拮抗して存立する『制度的実在』のリアリティを聞き届け

因果が認められているわけではない」と言う。

著者は、「選択や承認という『決定』の行為を因果的に理解する可能性は十分に認められるとしても、それ自体も因果的理解である以上、何らかの探求の行為を踏まえているはずであり、よって、そうした探求を支持する選択や承認という『決定』に先行されている、と。こうして、いずれにせよ、私たちの因果的理解の深層には、選択や承認という『決定』があつてはじめて出来事が個体化され探求が成立する、という確固とした原因の先行性が存していたのである」と述べ、

「実際、自分が何ごとか『決定』するとき、その『決定』それ自体を一つの行為として捉える視点は自分にはなく、自分ならざるところにしかないはずである。よって、『決定』という、あたかも自律性を暗示するような表現

たことになるのではなからうか」とまとめている。

第四章 確率的因果—残響のリズム論究

著者は、ヒューム因果論の第三概念「必然性」を音楽のリズムにたとえており、これを「未来の位相」と呼ぶ。人は未来を予測して楽しく明るく生活して行かなければならない。幸い生活のリズムは、突然転調しない限り予測できるものであり、未来を見すえて、リズムは規則的に刻まれる。

「自然科学の根底をなす量子力学において、因果関係は確率概念を含めて解釈されなければならず、」また「私たちは日常生活においてほとんど常に確率的因果に訴えている。」これに対して、哲学者は因果を確率的に論じるとき、その解釈を論理的なもの、客観的なもの、主観

的なものという三種に分類する。

確率概念を正確に、解釈することは容易なことではないが、著者は、タイプカートゥンかという考察をしている。転がっているゴルフボールをリスが蹴飛ばして結果が変わる場合がある。こうした「偶然の出来事についての確率」が単独的な出来事「トークン」であり、ゴルフアの実力など「複数原因の確率」が「タイプ」である。

次に著者は、負関連、負原因というものについて考察をしている。正の関連は、結果の確率を高めるものであり、負の関連は低めるものである。ゴルフボールをリスが蹴飛ばすときが、正あるいは負の「関連」であり、落葉剤を噴霧したとき生き残る植物に相当するものが「負の原因」である。

以上から著者は、因果概念の本性は、無数のに見ていただきたい。
ヒュームの「残響を消し去る道筋が、瞬間の位相から、過去—現在という連続の位相へと、さらに明確に鳴り響いてきた。よって、次は、未来の位相を見通すため、因果的必然性の問題によせて、規則性の問題、つまりはリズムの論究へと進もう」と言う。

「確かに、確率的因果ひいては因果性は、偶然性とは異なり、未来へ関わりゆく。過去の不確実性だけでなく、未来の非決定性へも触れているのである。……未来は、事実として、そもそもどこにもない。だから、支配する他者にもそもそもなりえない。そうであるなら、確率的因果そして因果性が未来に関わりゆくとき、その道筋は、いわば定義的に、他律性を排しているのである」と述べている。

さらに、著者の主張は、「たとえそれ自体も

原因に基づく「偶然性とは異なり」、確率性を含み、「未来に対して確率に従う以外に合理的な指針はありえない」と言う。

著者は、同時時刻を切り口とする「共時的問い」と、時の経過を切り口とする「通時的問い」の区別に言及している。これは、ある観察データについて、ある時刻の次に見出される「予見」に関するものが前者の問いであり、すべてのデータの「一般化」された結果に関するものが後者の問いである。このように、確率運動学の概念にも、配慮を示しながら、最後に著者は、「因果的超越」から「制度的実在」へと飛躍する「訳の分からない」プロパブルな瞬間を探っている。「他者」による確率的な因果に従うしかない瞬間に、「自己」が一種の爽快感をもつ実在として生まれてくると言っているのである。うが、著者自身の文章から考察のプロセスを直

規範として未来に触れているといわれたとしても、そうした規範性を主張の事実として押さえ返した途端に、実はせいぜい現在までしかあてはまらない、普遍性を著しく欠いた議論になってしまうと、そういわざるをえないのである。さらには、確率的因果に関しては、それ固有の問題性も自己言及的に降りかかる。「……おそらく、このように考えてくることによつて、未来の非決定性というものの本来の像がほの見えてくるのでなからうか。それは実は、事実としても規範としても届くことのない位相、経験のなかにも理念や法則のなかにも不在の位相であろう。それが何であるか、私には分かりようがない。ただし、それを想像するわずかな手がかりは、『私の死』にあるとはいえるかもしれない。『私の死』は、過去事象の対極にある、徹底的な不在の事象であると私には思われるか

らである。そして私は、『因果的超越』に抗する、『制度的実在』の真のありかを求めるなら、それは規範性を越えて、こうした不在性の次元に焦点点してくると、そのように感じられるのである^④と続く。

以上で紹介を終えたい。著者は、「あとがき」で、『プロバブルな瞬間』にも、『訳がわからない』ことに伴う一種の爽快感が生成するはずである。「自由な未来といった明るいイメージ」を求めて、『制度的実在』というのは、この非決定性あるいは不在性を通じて、そうした希望を担う位相である」と捉えている^④。

著者は、本書に続けて『原因と理由の迷宮』、『原因と責任の迷宮』を問うと予告している。そこでどのような議論が展開されるか楽しみである。

る。

本書を紹介してくれたのは、モラロジー研究センター教授の永安幸正氏である。ひととおり読んで感想を送ったところ、review articleを書かないか、ということになった次第である。

私は技術者をリタイアした者であるが、技術者にもいろいろあつて、量子力学を用いるような分野に在籍したことはなく、主に工学の分野にかかわってきたので、哲学はもとより確率論も門外の素人である。著者のいきごみのこもった研究をどこまで正確に紹介できたか自信はないけれども、紹介者としては、本書によつて因果の世界の迷宮を少々垣間見たような気がする。学ぶところは極めて多かつた。皆様に、是非ご一読をおすすめしたい。

〈引用文献〉

- (1) 一ノ瀬正樹『原因と結果の迷宮』勁草書房、二〇〇一年、八ページ。
 (2) 同、九一〇ページ。
 (3) 同、一五ページ。
 (4) 同、一六ページ。
 (5) 同、二二ページ。
 (6) 同、二〇ページ。
 (7) 同、二二ページ。
 (8) 同、二二ページ。
 (9) 同、二三ページ。
 (10) 同、二四―二五ページ。
 (11) 同、二九ページ。
 (12) 同、三五ページ。
 (13) 同、四〇―四一ページ。
 (14) 同、四一ページ。
 (15) 同、二五ページ。
 (16) 同、七三―七四ページ。
 (17) 同、七四ページ。
 (18) 同、七五ページ。
 (19) 同、七五ページ。
 (20) 同、二六―二七ページ。
 (21) 同、九四ページ。
 (22) 同、一二五ページ。
 (23) 同、一二五ページ。
 (24) 同、一二六ページ。
 (25) 同、一三〇―一三二ページ。
 (26) 同、一七六ページ。
 (27) 同、一八一ページ。
 (28) 同、一八六ページ。
 (29) 同、一八七ページ。
 (30) 同、一八八ページ。
 (31) 同、一九八ページ。
 (32) 同、二〇八ページ。

〈参考文献〉

- (1) 一ノ瀬正樹『人格知識論の生成』東京大学出版会、一九九七年
 (2) ポール・G. クンツ(一ノ瀬正樹訳)『ホワイトヘッド』紀伊国屋書店、一九九一年